

青目釈『中論』と『十二門論』の異同について

研究生 安井 光洋

青目釈『中論』（『青目註』）は龍樹の主要著作である『中論』の注釈書であり、鳩摩羅什による漢訳のみが伝わっている。この『青目註』はチベット語の『無畏論』との類似が多く見られるが、両者の成立背景については未だ確定的な結論が得られていない。さらに、『青目註』はその序文で、羅什による加筆訂正が指摘されている。

他方、『十二門論』は龍樹の著作とされ、『青目註』と同様、鳩摩羅什による漢訳のみが現存している。この典籍では『中論』の偈頌がそれと明記されることなく引用されており、全部で二十六ある偈頌のうち十九偈が『中論』からの引用と思われる偈頌となっている。さらに、『十二門論』は『無畏論』および『青目註』との間にも多くのパラレルが存在している。このような両者の関係性について、本発表では改めて実例を挙げながら考察を試みた。

実際に挙げた例としては、まず『中論』第七章の第一偈に対する解釈を『無畏論』の注釈と併せて比較した。ここでは『十二門論』と『無畏論』が同様の解釈を示しており、アピダルマの生住滅の思想を「無限遡及の過失に陥る」として批判している。しかし、この無限遡及の過失は続く第三偈で論じられるものであるから、『無畏論』の注釈は重

複していることになる。このことから『青目註』はここでは『無畏論』の解釈を採用せず、異なった解釈を示しているものと思われる。他方、『十二門論』は上述の第三偈を引用していないため、表現は重複していない。

また、『十二門論』は同じ第七章の第十四偈も引用しているが、その注釈は『無畏論』の同偈の注釈とほぼ一致する。しかし、『中論』のこの偈では『十二門論』で論じられない第二章に関する言及が見られる。そのため『十二門論』ではこの第二章に関する記述のみが巧みに省かれつつ、『無畏論』の注釈が引用されている。

さらに、『十二門論』では『中論』第十三章の第三偈と第五偈も引用されており、そこに『青目註』との興味深い異同が見られる。まず、第三偈はほとんどの注釈書が反論者の説を唱えている偈と解釈しているのに対し、『青目註』と『十二門論』は龍樹の偈と解釈している点で一致している。しかし第五偈では明らかに前半が反論者の主張で、後半が龍樹の主張であるにも関わらず、『青目註』はこの偈全体を龍樹の主張であるとす。他方、『十二門論』は前述第三偈の注釈で第五偈の後半のみを引用しているため、いずれも龍樹の説として挙げられていることになり、『青目註』のような矛盾は生じていない。

以上の考察から、『十二門論』は明らかに『無畏論』と『青目註』の説に基づいて作成されており、さらにそれが羅什による編集の産物である可能性が考えられる。